

## 電磁環境技術講演会を開催

R.G.Olsenワシントン州立大学教授を迎えて  
(電力技術研究所 電力グループ 送変電チーム)

平成12年5月30日に、R.G.Olsenワシントン州立大学教授を迎え、名古屋支店（千代田ビル）にて電磁環境技術の講演会を開催いたしました。R.G.Olsen教授は、IEEE（米国電気電子学会）のEMC（電磁両立性）ワーキンググループの委員をされるなど、電磁環境技術の分野では世界的に活躍されています。

当日は、配電・工務・用地など広い部門から約50名程度が参加され、電力設備周辺の電磁環境に関する工学的研究の動向について講演していただきました。主な講演内容は、下記の通りです。

### (1) 最近の米国内の健康影響に関する研究動向

1993年から6年間、米国において行われたEMF-RAPID計画（電磁界の研究と公衆への情報普及）の最終報告がNIEHS（米国環境健康科学研究所）により米国議会へ行われ、「電磁界が何らかの健康リスクを提起しているということを示唆する科学的証拠は弱い」と結論しました。これにより、健康影響評価に関する研究は鎮静化の方向に向かっています。

### (2) 米国内の基準、規制の動向

EMF-RAPID計画の最終報告を受け、近年では、マスコミをはじめ、一般大衆の多くは電磁界に対して危険なものと認識しなくなってきました。しかしながら、郡や村単位では、科学的な根拠がないまま、磁界に対する規制を設けているところがあるのも実状です。R.G.Olsen教授は、このような状況に対し、



科学者の立場から、「基準や規制は科学で得られた知見に基づいて作られるべきものである」との意見を述べられていました。

### (3) 今後の電磁環境研究の課題

電磁界の健康影響に対する研究は収束方向であります。機器との協調に関する技術の確立は、今後、ますます重要であると考えられます。それに関する研究成果として、磁界分布の予測技術についてOHPを用いて視覚的に説明していただきました。

また、米国固有の屋内配線方式による問題として、接地線と水道管の接続に起因する「接触電流」という電磁環境に関する新たな研究について紹介があり、国により技術的背景が異なることも認識することができました。

電磁環境という難しい技術分野の講演会でしたが、約1時間にわたり、わかりやすく説明をしていただきました。そのため、聴講者からの質問も活発で、予定していた30分では足りず、直接、Olsen教授に対して質問されていた方もいらっしゃいました。

このような機会を活用して電磁界に対する最新の研究成果について理解を深めるとともに、お客さまに対して正しい情報を発信できるようにしていきたいと考えております。



執筆者 / 清水雅仁  
Shimizu.Masahito@chuden.co.jp